

2022年10月登録

World Heritage Irrigation Structure

Teradani Irrigation System (Canal)  
Located in the Tenryū River System in Japan, is hereby recognized as a World Heritage Irrigation Structure.

ICID-CIID 73<sup>rd</sup> IEC Meeting, Adelaide, Australia, October 2022



世界かんがい施設遺産

World Heritage Irrigation Structure in Japan

Teradani Irrigation System (Canal)

寺谷用水



## 寺谷用水土地改良区理事長 池田藤平 あいさつ

去る令和4年10月6日にオーストラリアのアデレードで開催されたICID(国際かんがい排水委員会)理事会において寺谷用水が「世界かんがい施設遺産」に登録されました。誠に名誉なことと存じますとともに寺谷用水開祖平野重定公没後400年という大きな節目に、重定公の墓前に登録の報告ができたことは、感慨も一入です。



寺谷用水が登録に至った1つ目の理由は、天正16年(1588年)に徳川家康のもと重臣伊奈忠次の指揮により平野重定が工事に当たられ「民福の基盤は壛田にあり壛田の本義は水利の完璧を期するにあり」の理念に基づき天正18年(1590年)に用水が完成したという長い歴史にあります。

2つ目の理由は、天竜川の氾濫を防ぐために「大囲堤」を造り、これに交差させて埋め込んだ「大塚樋」が治水と利水を同時に実現した画期的な工法であったことです。

3つ目の理由は、過去に大雨の度に姿形を変えた暴れ天竜からの取水ができなくなり、幾度となく取水口を上流に移動した苦勞の歴史があることです。

4つ目の理由は重定公が編成した「井組」という、自主的な維持管理を目的とした組織の存在です。当時の井組は73ヶ村に及び、用水の引入れや各地域への分水、また施設の修繕などの用水に関係する仕事を当番制で行っていました。寺谷用水の430年の歴史の中で、大きな水争いがなかったことは何よりの誇りだと思っております。井組は現在の当土地改良区傘下の19水利組合に互譲の精神のもと脈々と受け継がれております。

私達は「世界かんがい施設遺産」の名に恥じぬよう、寺谷用水を良好な状態で未来に継承してまいります。

最後に、この度の登録にあたり御支援、御協力いただいた多くの皆様に深く感謝申し上げ御挨拶いたします。

## 世界かんがい施設遺産登録のお祝い

### 静岡県知事 川勝平太氏

寺谷用水が、世界かんがい施設遺産に登録されましたことを心からお慶び申し上げます。

天竜川の左岸地域に安定した農業用水を供給するため、1590年に造成された延長約12kmの寺谷用水は、水田農業の発展と地域振興に大きく貢献するとともに、現在も約1,500haの農地を潤し、県民の「食」と「暮らし」を支える、まさに「命の水」を供給する重要な農業生産基盤であります。



造成当時、天竜川は暴れ川と呼ばれ、洪水のたびに莫大な堆砂と流路の変更を繰り返し、安定した取水が困難でした。これを克服するため堤防と交差させて大塚樋を設置することで、取水と農地の開発を同時に実現したことは、日本のかんがいの進展に大きな影響を与えた革新的な技術であります。また、地域の農業者により、農業用水を一元的に管理する「井組」が組織され、400年以上にわたり用水管理が綿々と受け継がれております。

今回の登録は、当時の革新的な技術の導入と、地域の皆様による卓越した維持管理が評価されたものであります。今後も、施設の持続的な保全や、登録を契機とした地域づくりへの活用を通じて、先人たちの偉業であり、かけがえのない地域の宝である「寺谷用水」が、未来へ継承されることを期待しております。

## 世界かんがい施設遺産登録のお祝い

### 磐田市長 草地博昭氏

寺谷用水土地改良区の皆様におかれましては、400年以上にわたり地域の暮らしを支える「命の水」として、農業用水の安定供給や農業用施設の維持管理にご尽力をいただき、誠にありがとうございます。また、寺谷用水の恩恵を授かる地域の方々が創設者に感謝する独自の文化を生み、継承してこられたことに敬意を表します。

このたびは、寺谷用水の歴史的、技術的な功績が認められ「世界かんがい施設遺産」に登録されましたことを、心からお慶び申し上げますとともに、登録決定に至るまでの関係者の皆様の取り組みに対しまして、感謝申し上げます。

寺谷用水は、天竜川の治水と利水を一体的に行う革新的なかんがい技術の導入により、流域水田の水不足の改善と食糧不足の解消に大きく寄与し、農村の発展に貢献した施設として高い評価を得ています。現在の用水路は、土水路からコンクリート造りへと姿を変え、今でも適正に維持管理されており、水の供給を通して、地域農業の重要な役割を果たしております。

今回の登録を契機に、市民の皆様には歴史ある寺谷用水の魅力や技術を再認識し、地域への誇りと愛着を深めていただくとともに、国内外へ情報発信することで、交流人口の拡大や地域教育の場となるよう、寺谷用水土地改良区をはじめ、関係機関の皆様と連携を図り地域の発展につなげてまいります。

結びに、寺谷用水土地改良区のますますのご発展と皆様方のご健勝を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。



### 静岡県立農林環境専門職大学 中山正典氏

世界かんがい施設遺産は2014年に創設された制度です。創設当時、全国の農業用水を紹介した書籍では、静岡県において深良用水が詳細に報告されていましたが、天竜川流域では「寺谷用水」の記述はほとんど見当たらない状態でした。用水の歴史的役割をもっと多くの人に理解してもらいたいと強く思ったことを記憶しています。2019年1月に磐田市歴史文書館で「寺谷用水」の企画展、シンポジウムが開催されました。そのとき土地改良区、県のご理解もあり、想像以上の反響があり、それが今回の世界かんがい遺産登録への機運となったと思っています。

土地改良区と県が中心となって遺産登録申請書を作成していく中で、新たな歴史的な価値として認識できるようになったことに、「寺谷用水は17世紀に北関東などで大展開する農業土木の技術の「先駆け」ということがありました。我々が全国、世界に向けて誇りとする事ができる寺谷用水の「歴史的価値」の一つです。

農業用水は現在、その多面的機能が語られるようになっていきます。多面的機能とは水田かんがいでなく、畑かんがい、観光・地域活性化、地域教育、環境・景観保全、生態系保全、親水施設、自治形成、などの機能のことです。寺谷用水は水源涵養などこよりも地域貢献してきたということもありますが、さらにより地域に愛される農業用水となるため何ができるのか、みなさんと一緒に考える良い機会になることを祈念いたします。



令和4年（2022年）10月6日授賞式（ICID国際執行理事会総会）  
オーストラリア・アデレード



世界かんがい施設遺産 登録記念碑  
寺谷用水土地改良区

# 「寺谷用水大絵図」 宝暦年間(1760年頃) 寺谷用水土地改良区蔵

四番杵樋



寺谷用水土地改良区の玄関にある「寺谷用水大絵図」(地名等赤字は編者が記入)

最上段に寺谷用水四番杵樋を描き、絵図の最下段に遠州灘が描かれ、寺谷用水(赤線)を中心にして管理組合のある村々を詳細に描いた絵図である。2万石の領地を潤し、この絵図には基本的に受益地の集落は全て書き込まれており、領主名、村名、石高が詳細に記入されている。天領と私領が色分けされている。図には仿僧川が天竜川東派川に流れ込んでおり、仿僧川が天保2、3年(1831、1832)に太田川へ取り付けが行われているので、それ以前の地図であることがわかる、領主名から宝暦年間(1751～1764)の製図が想定される絵図である。『農と水の民俗』中山正典著

# 寺谷用水の主要施設位置図



阿蔵取水口跡（浜松市天竜区阿蔵）



神田取水口跡（磐田市神田）



一番堀跡（磐田市掛下）



大塚樋跡（磐田市寺谷）



寺谷用水土地改良区（磐田市加茂）  
寺谷コントロールセンター



船明ダム（浜松市天竜区船明）



神増分水工（磐田市神増）



高木分水工（磐田市東名）



前野分水工（磐田市加茂）



尼ヶ崎西分水工（磐田市気子島）

Google Earth

# 1 寺谷用水の起源 —開祖 平野重定—

## (1) 「暴れ天竜」の激流

天竜川は、長野県の諏訪湖を源流とし、遠州灘へと注ぐ日本有数の急流河川です。「天竜」という猛々しい名が表すとおり、古くから、暴れ川として恐れられ、水害の歴史を挙げれば、枚挙にいとまがありません。

天竜川の流域には、中央構造線をはじめとする多くの断層が走っているため、土地が崩れやすく、大量の土砂が下流へと運ばれます。洪水時には、この土砂が激流によって押し流され、さらに壊滅的な打撃を与えました。特に、下流部での被害はひどく、怒涛のような流れと、おびただしい土砂の流出で、流路すら変えることも、しばしばでした。

## (2) 開発の萌芽 開祖 平野重定

この天竜川で初めて本格的な水路が造られるのは、戦国時代のことです。各地の戦国大名が覇権をめぐって、しのぎを削り、自国の国力の増強を目指したこの時代、天竜川でも大規模な治水、利水事業が試みられます。

天正16年(1588)当時、浜松城主として遠江を支配していた徳川家康は、この荒れ狂う大河から水を引く寺谷用水の開発に取り組みました。工事を任されたのは、家臣であったいなただつぐ伊奈忠次と、在地の代官であったひらのしげさだ平野重定でした。天竜川からの取水口を寺谷村地内に定め、水路は天竜川の左岸の支流を利用し、開発されました。

二年後の天正18年(1590)、彼らは、見事に延長12kmもの水路の開削に成功し、そのかんがい面積は73ヵ村、約2,000haにも及びました。天竜川の豊富な水を利用した農業は、その後、2万石もの収穫をもたらしたといえます。

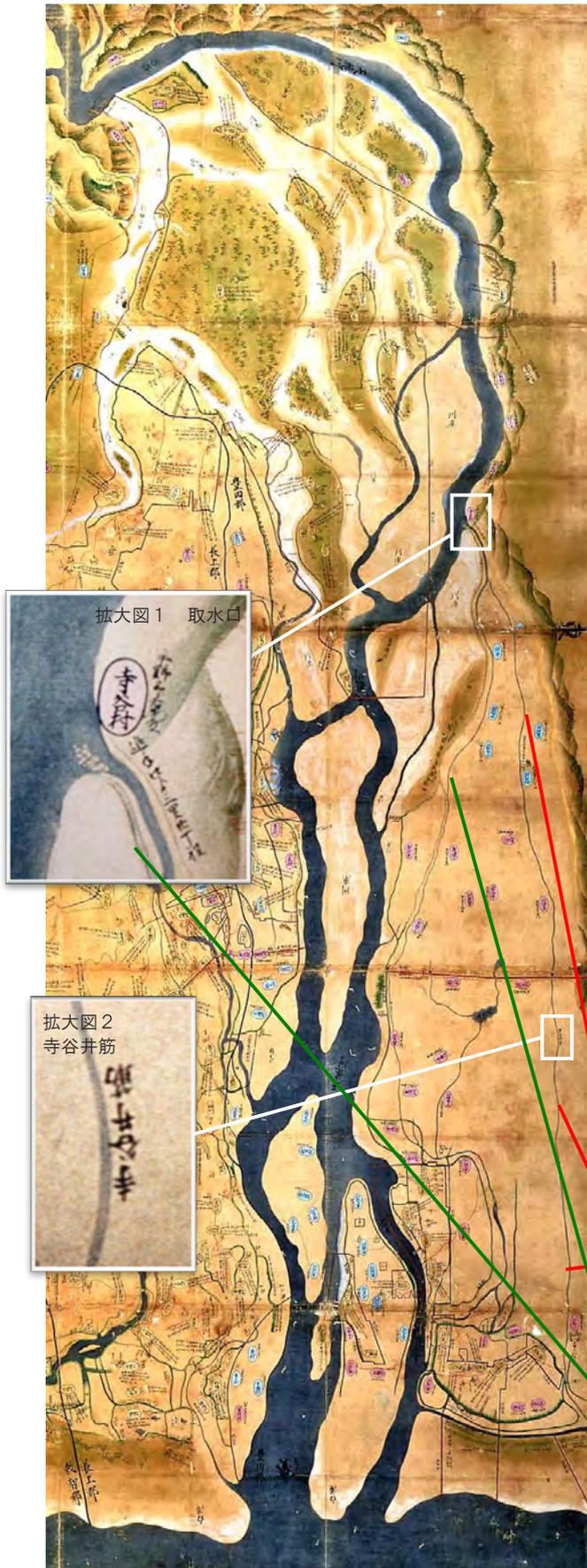
天竜川の豊満な水を利用した農業がようやく萌芽を迎えることとなったのです。

寺谷用水 12km

河川堤防  
(大囲堤)



平野重定公墓所(大円寺)



拡大図1 取水口

拡大図2  
寺谷井筋

「青山家御領分図」の一部  
(1678年 450cm×380cm 浜松市立博物館蔵)

## 2 歴史を変えた大塚樋

- 暴れ天竜からの取水を可能にした革新的技術 -

天正16年(1588)の寺谷用水の開削工事に先立ち、徳川家康の家臣伊奈忠次と代官平野重定が磐田市寺谷の地に立ち会い、ここに長さ12間(約21m)、幅2間2尺(約4m)、高さ6尺2寸(約2m)戸無しの大塚樋を設け、天正18年同所より浜部村までの道程3里余(約12km)の大井堀を切り開いて導水しました。

塚樋とは、水路と堤防や道などを横切らせるため、そこに埋め込んだ函渠で木製でした。洪水を起こしがちな大川から農地を守るため、寺谷用水は天竜川左岸の堤防(大塚堤)とそれに交差して埋設された大型の木製函渠を設けました。その設計は最先端のものでした。

大塚樋は釘を用いずに多数の木製の柱や板を精巧に組み合わせて作られました。近代的土木技術が確立していない16世紀の日本において、大川の水流にも抵抗できる構造物を木材だけで作り上げたのは驚異的であり、前例のないものでした。

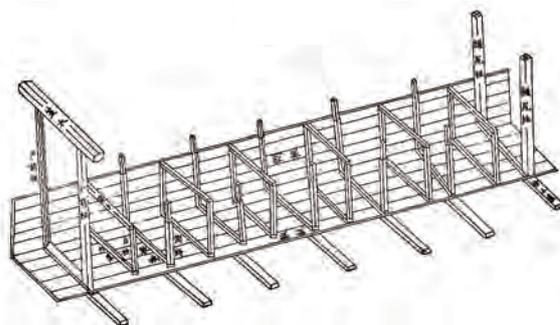
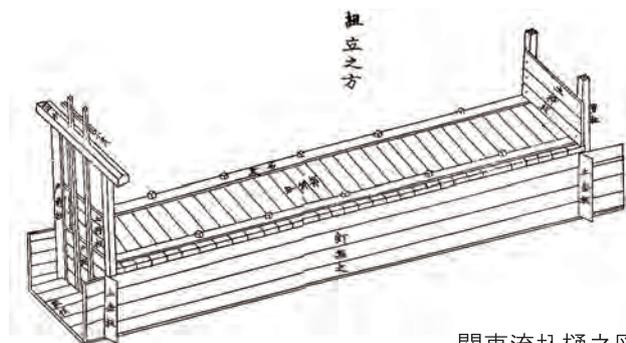
寺谷用水の長さ12間(約21m)の大塚樋は、大天竜に相応しい巨大な塚樋であり、戸無しであることが特徴でありました。この新しい技術の適用は、大川沿いの水田農業の発展に寄与し、同時に農民の経済状態の改善を加速しました。

この事業に当たった伊奈氏は、その後利根川の付け替えや、世界かんがい施設遺産となっている見沼代用水、備前渠用水(埼玉県)など、関東平野の治水や利水、新田開発事業に携わり、数々の偉業を成し遂げました。その技術は「関東流(伊奈流)」と呼ばれ、江戸中期まで幕府の工法の基礎となりました。



大塚樋ジオラマ

(大塚堤と大塚樋を組み合わせた型で設置された取入口の想像模型)  
(静岡県農地局岩崎康正氏、作製)



関東流塚樋之図「土木工要録」



寺谷大塚樋 「寺谷用水誌」(1925年) 寺谷用水組合



堤防跡に設けられた旧取水口碑と現在の水路(2021年)

### 3 地域自治組織による用水管理 — 井組から土地改良区へ —

#### (1) 「井組」の設立と運営

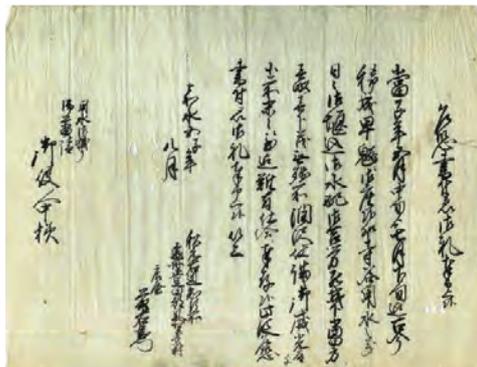
平野重定は、寺谷用水の管理を行う「井組」(用水組合)を磐田市寺谷以南の天竜川左岸73ヶ村で組織しました。監督は、江戸時代を通じて「用水御掛り」と称し、平野重定をはじめ代官、奉行、または中泉代官が当たり、掛川城主が兼任したこともありました。

井組の組織は、73ヶ村を14組に分けて、各組から「物頭」を一人ずつ選出しました。物頭は年番制をとり、毎年4人の当番を選び、常勤としました。この当番は、水元(水源)、坎樋(取水口)、引き入れ、用水路沿い村々への分水管理など、すべての仕事に関わり、管理を把握していました。また、物頭の中から2~3人の「用水惣代」を決めて用水御掛りへの重要願書を書くなどの対外的な代表者となりました。

井組の経費は、役員給与などの管理費用とともに、7年ごとに行われた坎樋伏せ替えの費用を含め、各村々に割り振り徴収しました。また、天竜川の増水により砂礫が坎樋の前に堆積するため、その除去作業には村々から人足を出して行っていました。

さらに、幹線水路の土砂浚渫を用水沿いの村々に義務付け、代官の見分がありました。用水路の草木は、4・6・7月の3回は必ず切り払い、物頭がよく見届けて役所に届け出て、役人の見分を受けました。

このような努力の結果、周辺の地域では17世紀の平均では10年ごとに早魃のために食料危機が発生しましたが、寺谷用水の受益地では飢饉の記録は残っていません。嘉永5年(1852)は全国的に早魃があったが、この寺谷用水沿いの村々は早魃から免れることができたとの御礼書が残されています。



御礼書(嘉永5年1852) 兼子春一家文書



中之郷村から出された田植え済の書(嘉永5年)

#### (2) 管理機関の移り変わり

用水管理組織である井組は、時代の要請により水利土功会や水利組合などを経て、現在の土地改良区に発展的に改組し継承されています。

年代	管理機関名	管理者及び管理機構	事務事業の処理方法
天正16年(1588)~ 明治7年(1874)	井組	用水御用掛 (奉行又は代官)	用水惣代(5人) 年番物頭(15人)
明治7年(1874) ~明治12年(1879)	七十三ヶ村井組	惣代4人 (うち一人を取締)	御用聞き2人
明治13年(1880) ~明治18年(1885)	寺谷用水七十三ヶ村組合	惣代長 戸長委員	惣代(3~5人)
明治18年(1885) ~明治24年(1891)	寺谷用水組合水利土功会	豊田 山名 郡長 磐田	事務担当4人~5人 (うち一人を事務担当長) 別に工事委員数名をおいた
明治24年(1891) ~昭和26年(1951)	寺谷用水組合 (町村組合法の団体)	組合議会(議員27人) 管理町村長	事務委員 数人 参与員、助役、常務委員、収入役 若干名
昭和26年(1951) ~現在	寺谷用水土地改良区 (土地改良法の団体)	総代会 理事会(13人) 理事長1人を互選	理事長 事務長 主事、技師等若干名

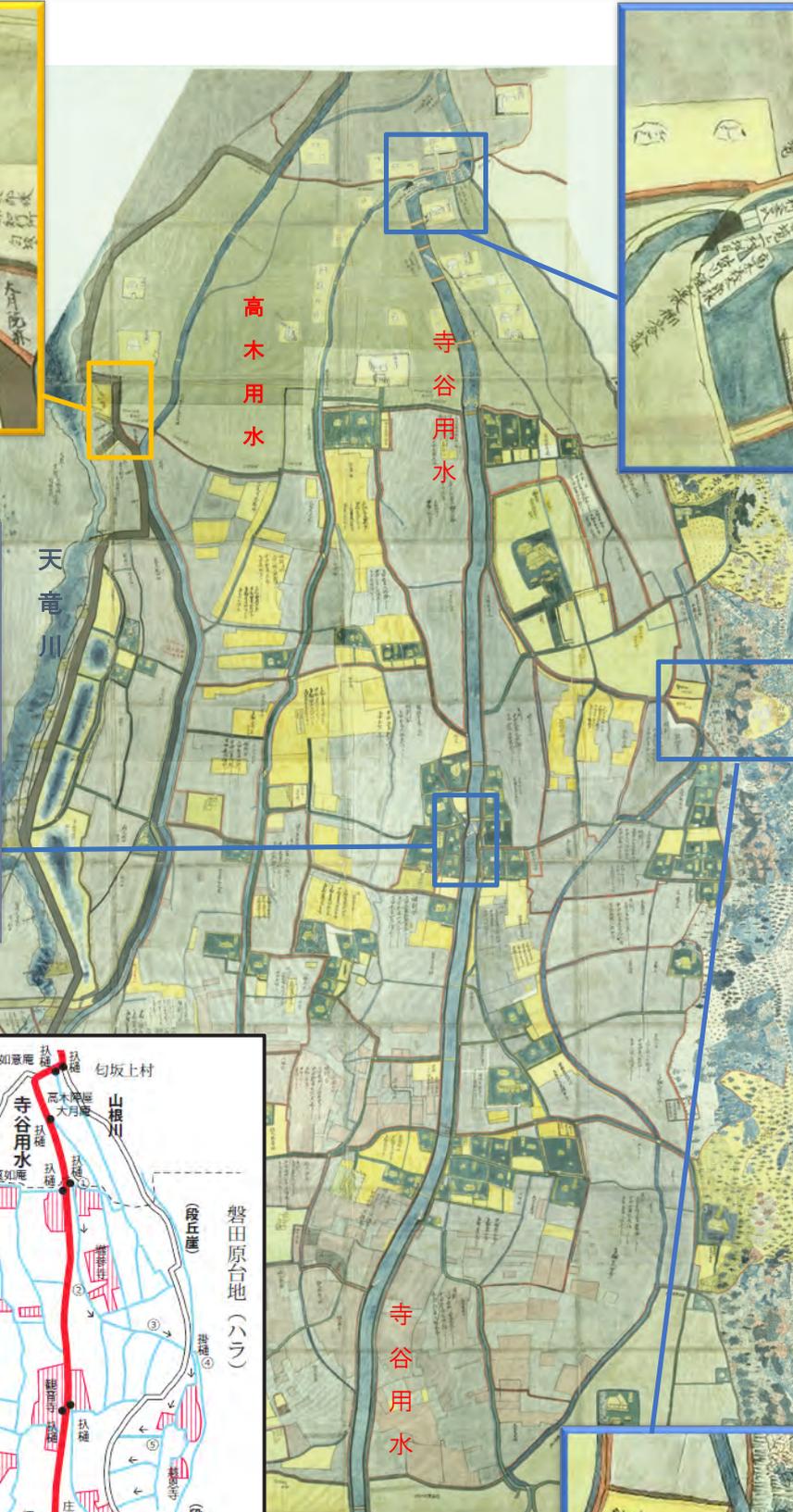
井組の用水管理図「匂坂中村絵図」 (1863年 縦2.6m×横1.7m 磐田市歴史文書館所蔵)



【拡大図1】  
大囲堤(堤防)



【拡大図3】  
水路内の杓樋  
(立会人名)



【拡大図2】  
水路内の杓樋 (立会人名)  
高木陣屋

匂坂中村の文久3年(1863)に描かれた絵図「匂坂中村絵図」が飯田恒雄家文書に残されている。匂坂中村は寺谷用水組合七ヶ村のひとつである。

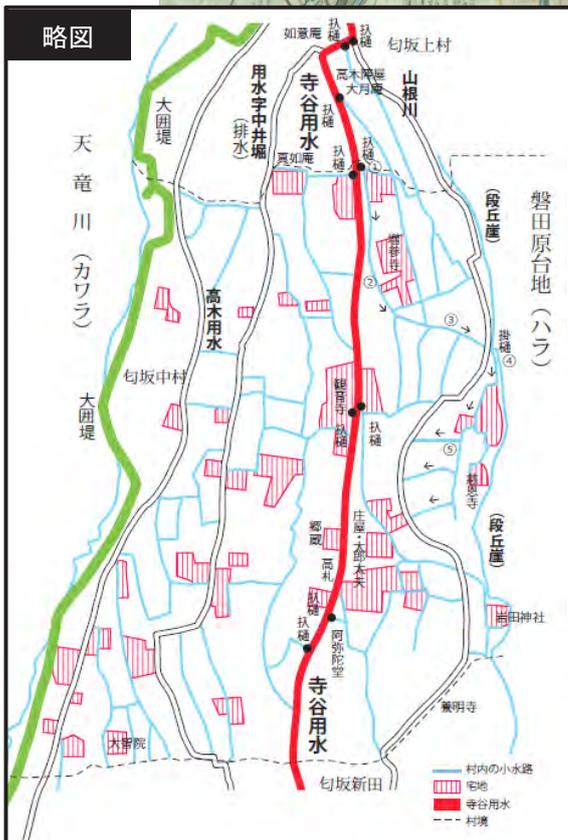
西に天竜川の河原が広がり、東には比高差40m程の段丘崖が南北に続く急傾斜地があり、両者に挟まれた南北に長い長方形の村域を持っている。

北から南へ水田域が広がっていて、そのほぼ中央を南北縦軸に寺谷用水が貫流している。

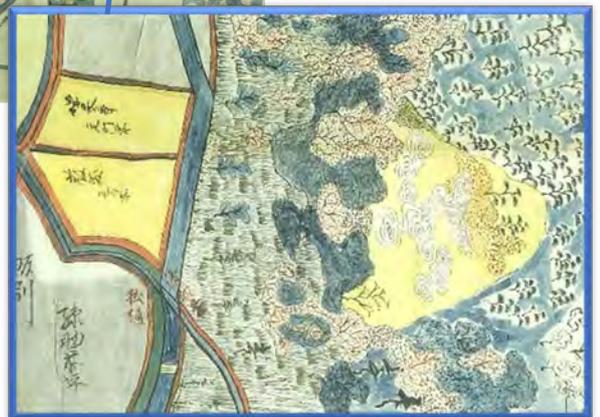
絵図には当時の土地利用の様子が描かれている。増参寺などの寺院や陣屋、宅地、高札場などがある。

また、大囲堤や高木用水杓樋、掛樋、小水路が詳細に描かれている。

『農と水の民俗』



【拡大図4】  
掛樋  
磐田原台地  
段丘崖



# 4 絶え間なき改良の歩み

## －取水口の変遷、水路改良－

### (1) 取水口の変遷

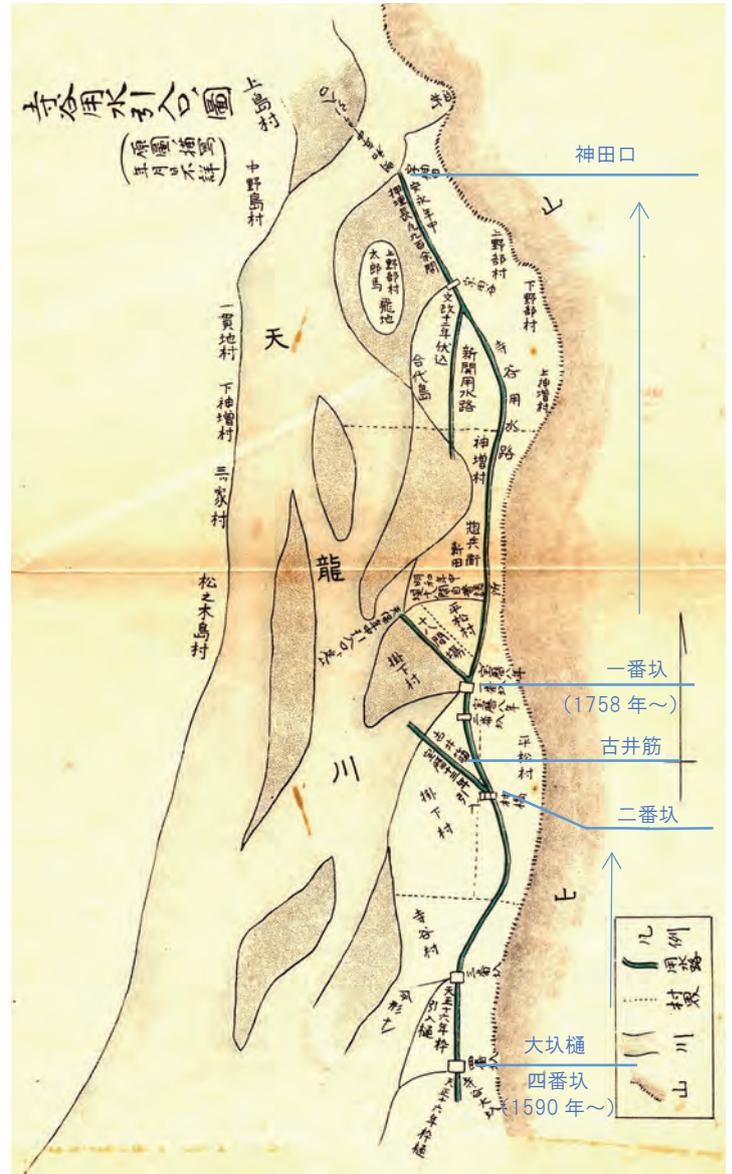
#### ① 旧幕時代

当時は、天竜川の治水策が定まらず、水は三方原と磐田原との間を勝手気ままに流れ、時に荒れ狂ったので、その都度、多額の費用と労力を費やし、取水口を上流に移さざるを得ませんでした。年々の引水の苦勞は、今日想像する以上のものであります。

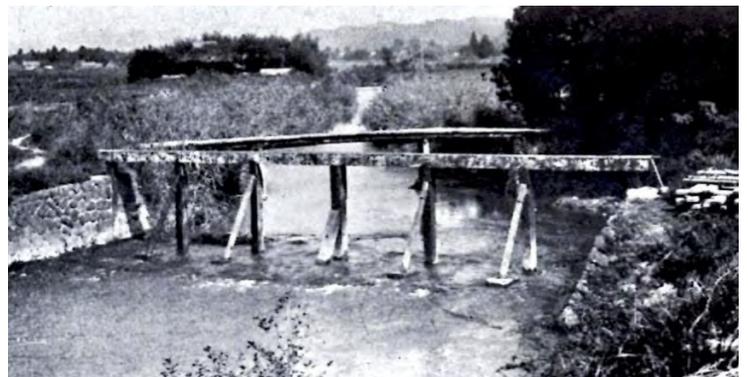
我々の先祖は、天の与える水量に安易に諦めをもって臨むことなく、天竜川からの用水引き入れに、積極的努力をなし、井組の組員が助け合い、各々その務めを果たし続けて今日に至ったのです。

旧幕時代の用水引入れの変遷と沿革(寺谷用水誌)

暦年	内容
天正 18 年 (1590)	寺谷地内に大塚樋を伏せ込み、二万石の水田に通水
元文 3 年 (1738)	寺谷の大塚樋からの取水が困難となり、寺谷から上野部神田までの二里余(約8km)の水路を掘り、水を引き入れる特権が幕府から与えられた
宝暦 8 年 (1758)	掛下平松地内に長さ 400 間(約72m)幅8間(約 15m)の水路を掘り、一番塚樋、二番塚樋を伏せ込み、一番塚樋から取水
宝暦 13 年 (1763)	掛下村の古井筋から取水
明和年中 (1764~1772)	川瀬が変わり字神田から取水。その後、また川瀬が変わり、堤18間(約33m)の間を井組の自普請として引き入れ場所とした。
安永年中 (1771~1781)	掛下村、平松村から反対が出て、再び神田口から取水
文政 12 年 (1829)	前年、天竜川の大洪水で神田以南の水路のほぼ全部崩壊したため、神田口から寺谷四番塚樋(大塚樋)まで官費900両で復旧
天保元年 (1830)	下野部地先の田ヶ谷へ、新たな塚樋を伏せ込み
天保 9 年 (1838)	またまた川瀬が変わり、十八間場の自普請場に金 250 両を投じて掘割



「寺谷用水入口ノ図」  
寺谷用水誌



十八間場  
「寺谷用水掛下板堰(全部開放状況)」 寺谷用水誌

## ②神田取水口 明治17年(1884)～昭和22年(1947)取水

明治年代に入っても、用水引水はさらに安定せず、神田の隠居淵に取水口を移そうとする願いは非常に強くなっていきました。しかし、その削岩工事は非常に困難で、多額の費用を要し、その負担により着手に躊躇していました。

明治16年(1883)社山疏水計画が起り、これと連合して、取水口を野部村神田に選り、長さ40間(72m)、巾8尺(2.4m)、高さ7尺(2m)の隧道を掘って取水工としました。そして同所から多賀洗堰までは連合の水路を作ってこれを使用しました。

その後、不幸にして社山疏水は中止となりましたが、明治22年(1889)鈴木浦八らの尽力により、多賀洗堰から掛下十八間場に至る寺谷用水専用水路を開設しました。これにより渦巻く200個(5.7m<sup>3</sup>/秒)の水が流入し、阿蔵取水口が完成するまで、およそ60有余年の間、区域内農業者の利福増強に貢献しました。



神田石水門  
寺谷用水誌

## ③阿蔵取水口 昭和22年(1947)～昭和54年(1979)取水

神田取水口建設から暫くして天竜川の改修により、川幅が拡張され、流身が対岸に向かって移動し、取水量が安定を欠くようになりました。明治30年(1897)には神田引入堰込工事を施工し、それ以降毎年のように巨額の費用を投じ、取水量の維持に努めました。そのため、取水口の移転の必要が生じ、水源に悩む社山疏水組合地域との同じ思いが、期せずして再び襲ってきたのです。



神田取入口引入工事(昭和13年)  
新寺谷用水誌



阿蔵取水口「磐田用水取入口」  
「水と人」磐田用水土地改良区連合誌

昭和2年(1927)平野睦則らが中心となり磐田用水期成同盟会を設立しました。東西の親和と連絡が非常に緊密となり、大橋亦兵衛が会長となって、事業の実現に向け猛烈な運動を展開しました。そして、県営磐田用水幹線改良事業を計画し、昭和4年(1929)の県議会に上程し、満場の賛成のもとに可決確定されました。

その後、戦争の非常時局に直面し、常にいばらの道に難渋を極めつつ推進を図り、昭和17年には金原治山治水財団の恩恵を受け、農地開発営団によって阿蔵取水口以下神田までの難工事が起工、昭和19年(1944)に完成して湧きかえる歓喜と感動のうちに通水式を挙げ、昭和22年(1947)完工しました。

## ④船明ダム 昭和54年(1979)～現在

天竜川総合開発計画の一環として佐久間、秋葉の両ダムが昭和31年(1956)、33年(1958)に建設され、河床が低下し、阿蔵取水口からの取水が困難となりました。昭和34年(1959)天竜川河状調査委員会が発足すると、委員となった土地改良区伊藤左一理事長は河床低下による取水不能の実態を強く訴え続けました。

昭和46年(1971)からは毎年のように取水口直下流の本川に床固ブロックを設置する堰上げ工事を行いました。

その後、竹山祐太郎県知事の絶大な尽力により、悲願の船明ダムの建設が決定し、昭和47年(1972)に着工しました。昭和54年(1979)ダムからの取水が開始されてここに初めて安定した取水が可能となり、取水対策の苦勞から解放されることになったのです。



阿蔵取水口 ダム障害対策工事  
水と人



船明ダム

## (2)水路の改良

天竜川の砂礫の多い氾濫域をかんがい区域とする寺谷用水は、浸透も激しく、海岸沿いの水田まで水を届けるためには、幾多の改良が必要となりました。特に、天竜川上流部にダム群が建設されると昭和30年代後半より河床が低下し、更に地域内の地下水位低下により減水深が増大して用水不足を来しました。このため、取水工事とともに配水機能の改善のため水路の改修が実施されました。

### ①用悪水路改良工事 明治21年(1888)～明治23年(1890)

明治21年に始まった用悪水路改良工事は、社山疏水連合工事分以南上神増地内から掛下地内寺谷用水在来の路線に達する間の工事及び掛下以南従前の用水流末までの路線改良を行いました。この改良工事は東海道本線の鉄道を横断し、鉄道以南の水田の用水不足と以北の悪水氾濫を避ける目的でも行われました。鈴木浦八を長とする改良工事委員会を組織し、明治23年5月に完了しました。これにより、土地の生産力が向上し、二毛作に転換できたところも出ました。そればかりでなく組合員数が増加し、負担の公平と軽減が図られました。



土水路の拡幅改良  
(磐田市一言:以下同地点) 新寺谷用水誌

### ②県営磐田用水幹線改良事業(寺谷用水分) 昭和8年(1933)～昭和22年(1947)

取入口から尼ヶ崎分水(気子島)に至る幹線水路と高木用水は寺谷から小立野に至る間、既設水路を利用し、これを拡充構築しました。当時としては先進的な両壁コンクリート舗装による水路で、完成したときは関係農民皆が驚異の眼を見張ったものでありました。戦時に入り、物資労力とも欠乏し工事の継続が困難となる中、食料増産隊並びに動員学徒等の応援により辛くも工事を続け、完成しました。



両壁コンクリート舗装構造への改良  
県営磐田用水幹線改良事業完了後

### ③県営寺谷用排水改良事業 昭和23年(1948)～昭和46年(1971)

上流取水口より導水の用水はよく南部までかんがいされつつありましたが、その下流は水路がないため或いは不完全なため用水は悪水と変わり、耕作の不便や減収等関係農家のこうむる被害が甚大でした。このため、支線用水路9路線 24,600m、排水路6路線 17,760m、排水機場3箇所を整備しました。

### ④国営天竜川下流用水事業 昭和42年(1967)～昭和60年(1985)

#### 国営附帯県営天竜川下流用水事業 昭和45年(1970)～平成8年(1996)

水路は、用水と排水を分離してコンクリート三面舗装とし、水の有効利用を図るために水路底を上げ、また危険防止のためネットフェンスが設置されました。

国営事業では、船明ダム直下流の取水工、左岸導水路 10,028m、寺谷幹線水路 13,575m、高木幹線水路 2,731m を施工しました。左岸導水路の用地買収はほとんど無く、いかに祖先の先人達が水利の妙を得ていたかがわかります。

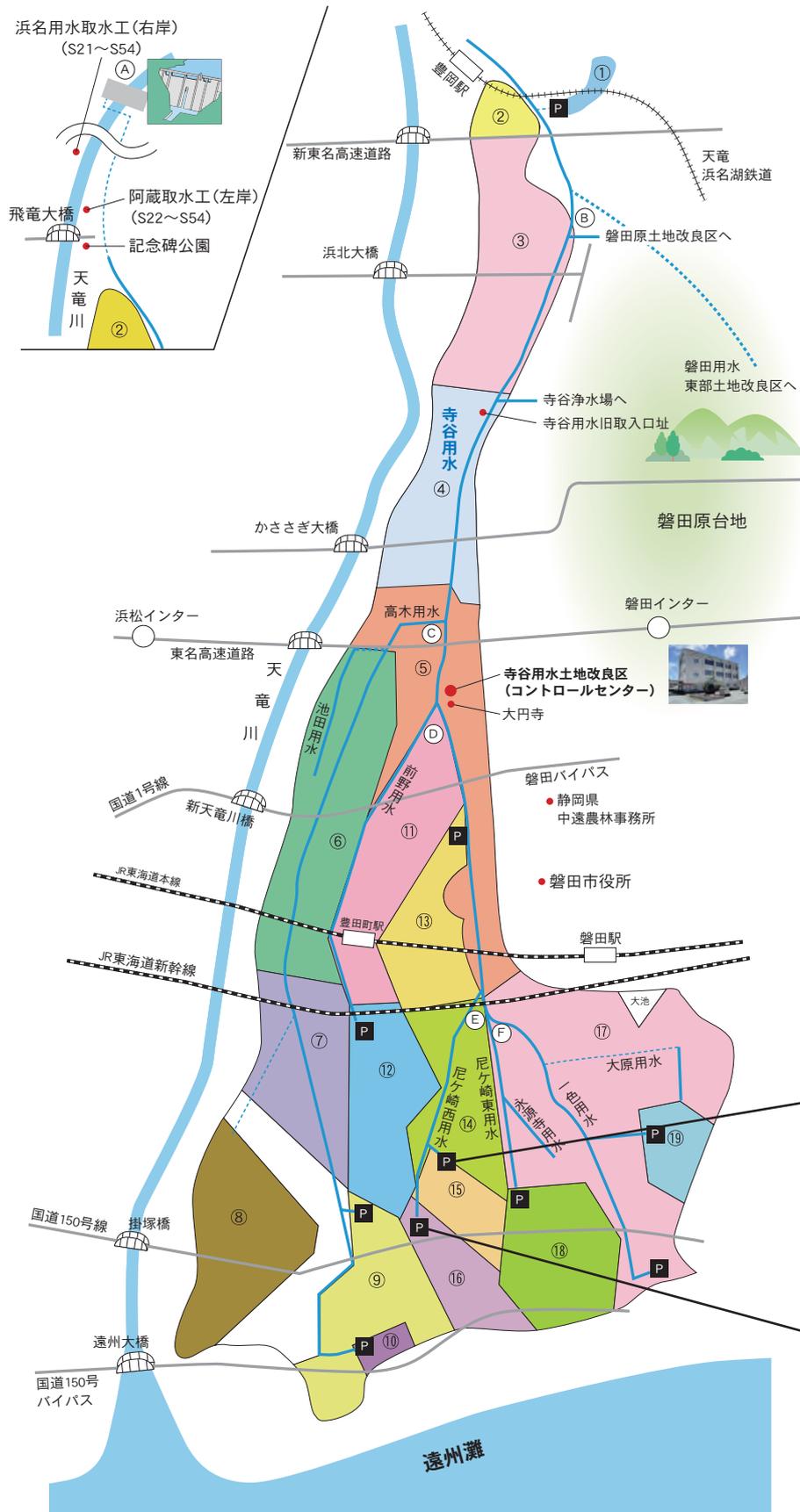
県営事業では、8路線 28,335m、畑地かんがい地区2地区、水管理システムを整備しました。これに伴い、寺谷コントロールセンターが建設され、事務所もこれに加わり、土地改良区の建物として現在の姿になりました。



三面コンクリート舗装構造への改良  
国営天竜川下流用水事業完了後(現在)

### (3)配水ポンプの設置 (パイプライン)

平成6年(1994)から、すべての水田に程よく水を配り続けるために、約700haの受益地を対象に末端水路のパイプライン化を行い、10ヶ所のポンプ場を整備し、平成30年(2018)完成しました。



	組合名
①	下野部パイプライン組合
②	村前・西野用水管理組合
③	広瀬パイプライン組合
④	岩田パイプライン組合
⑤	豊田地区幹線用水組合
⑥	高木上流用水組合
⑦	高木下流用水組合
⑧	掛塚用水組合
⑨	仿僧西パイプライン組合
⑩	竜洋畑かん組合
⑪	前野用水組合
⑫	前野草崎パイプライン組合
⑬	宮之一色パイプライン組合
⑭	尼ヶ崎西用水組合
⑮	小島パイプライン組合
⑯	仿僧東パイプライン組合
⑰	尼ヶ崎東用水組合
⑱	尼ヶ崎南パイプライン組合
⑲	福田大原パイプライン組合



田毎に付けられた給水栓



小島ポンプ場



仿僧東ポンプ場

## 5 未来への継承

### (1) 水神 平野重定公を祀る

#### ① 紀功碑

大円寺にある紀功碑は、寺谷用水の偉業とその功德とを永劫に祈念するため、当時豊田郡長池田忠一や鈴木浦八らが熱心に唱導し、用水組合有志や篤志家により明治21年(1888)に建立されました。

碑の篆額は公爵徳川家達(徳川宗家第十六代当主、明治初期静岡藩主)の筆で「利澤久遠」と刻まれ、撰文はこの美挙に協賛の誠意を示された県知事関口隆吉で平野重定公の功績を顕しています。



「寺谷用水紀功碑」碑文 初代静岡県知事 関口隆吉 撰文(漢詩)

**執戈荷犁 夙夜奉公 良田萬頃 世頼厥功 嗟後之人 庶克有終**

(碑文解説)

戈(ほこ)をとって戦い 犁(すき)をかついで耕す 日夜奉公に心を砕き 水を引いて万頃(極めて広い)の美田を作る 世の人はその功を讃(たた)う ああ後世の人々願わくば有終の美をなさんことを

#### ② 寺谷用水祭

毎年10月8日に、寺谷用水創設の記念祭、感謝祭が、土地改良区の主催で、重定公の菩提寺である加茂の大円寺で行われます。これは大正11年(1922)に重定公の墓所改造を機会に当時の寺谷用水組合の議決を経て、10月8日を重定公の命日とし、毎年挙行することになり現在に至っています。当日は、多くの来賓を迎え、大円寺本堂で盛大に執り行います。



#### ③ 加茂大念仏

磐田市無形民俗文化財に指定されている「加茂の大念仏」は、加茂東の集落の青年組織である鹿鳴会が母体となって行う念仏踊です。毎年8月の盆の夜、初盆の家々を回り、鉦と笛太鼓の調べにより踊りを行います。8月9日に大円寺にある重定公の墓前で行われる供養では、下記の歌枕が唱えられます。

「この墓を誰の墓かと 人問えば 云わずと知られた 重定公の墓  
平野なすその名も高き 後の世に なおも輝く 千代に八千代に」



#### ④ 秋葉講

寺谷用水の最下流部にある磐田市塩新田集落では、毎年4月に江戸時代から続く念仏講「秋葉講」が行われています。重定公は用水を開くにあたり、天竜川上流にそびえる秋葉山に祈願し完成させたといわれ、「水神 平野重定公」などの掛け軸を掛けて、赤飯や菓子を供えた祭壇に向かい、感謝の念と五穀豊穡の願いをもって和讃を唱えます。



## (2) 水源地への感謝と奉仕

### ① 水源涵養林

昭和31年(1956)、当時の寺谷用水土地改良区顧問 鈴木正一の提案により、天竜川への感謝の気持ちを込めて、浜松市天竜区水窪町において始めた事業です。

組合員全員の賛成により、反当6合の玄米を拠出いただいたものを財源として、県費の補助も得て43haにスギ、ヒキを植林しました。



令和4年4月には「水源涵養林育成事業」の継続した取り組みにより、内閣総理大臣表彰を受賞しました。寺谷用水土地改良区は今後も天竜川の水を守るために努力していきます。



### ② 感謝米

天竜川上流部の山林(水源)を管理している方々に感謝を込めて、平成24年(2012)より磐田用水東部土地改良区とともに感謝米活動を行っています。両土地改良区の組合員にご協力いただき、丹精した新米を長野県駒ヶ根市、同塩尻市、同喬木村、森林組合等に毎年寄贈しており、学校給食などに使われています。



## 6 中興の祖 - 用水に尽力した人々 -

幾多の先覚者に改めて感謝の誠をささげることを忘れず、計り知れないこの偉大な恩恵に浴している私どもは、今こそ互いに親和協力して、麗しくも尊い伝統に輝く寺谷用水の維持発展に挺身する覚悟を、一層新たにしたいと祈願しています。

きんばら めいぜん

**金原 明善** (浜松市安間町出身) 天保3年(1832)～大正12年(1923)



幼い頃から度重なる天竜川の水害による惨禍を体験し、天竜川水系の治山治水と開発こそ、遠州地域の人々の幸せを高める唯一の道と確信して、以来自分の資産の全てを投じ、寝食を忘れ事業を執行し、大きな業績を残した。

天竜の大美林と天竜川護岸、そして磐田・浜名両用水による豊かな遠州の大穀倉地帯など今日に見る地域の発展は、翁及び翁の遺志によって設立された金原治山治水財団(当時の理事長 鈴木信一)の多大な功績である。

阿蔵取水口と阿蔵隧道は、この財団による地元負担金18万2千円(現在価値約2億円)の全額寄付により実現した。そのため、感謝の念を表し「金原東隧道」と命名し、扁額が掲げられた。

寺谷用水土地改良区と磐田用水東部土地改良区は、昭和17年(1942)より毎年1月14日の「明善祭」に受益地で収穫された新米を明善翁の墓前に供している。



阿蔵隧道扁額「金原東隧道」  
磐田用水誌

すずき うらはち

**鈴木 浦八** (磐田市加茂出身) 嘉永5年(1852)年～大正7年(1918)



明治18(1885)年から4年間、寺谷用水組合事務担当長を務め、神田取水口および神田隧道の建設に尽力するとともに、豊富な水量を確保して、潤沢な用水の供給を可能とした。また、不幸にして社山疏水は中止となったが、明治22年(1889)改良工事委員長を併任し、多賀洗堰から掛下十八間場に至る寺谷用水専用水路を開設した。

さらに、わが国の耕地整理の前身のひとつ「畦畔改良」(静岡方式)の普及、大成者でもある。明治20(1887)年加茂西村の「畦畔改良」を集落全域で実施した。この耕地整理は日本の近代的営農への第一歩ともいべき耕地の整備であり、後の明治32(1899)年に法制化される耕地整理法へ発展していった。「換地」という用語は、事業を始めるに当たっての地主同士の議定書の中で翁が初めて使い、全国各地でこの手法を普及する説明の中で広めた。土地改良区東隣敷地内に翁の功績をたたえる碑が建立されている。

加茂西村戸長、県議会議員など要職を歴任。地租調査委員、池田銀行創設、池田橋建設などに尽力した。



鈴木浦八君碑  
寺谷用水土地改良区東隣

ひらの ちかのり

**平野 睦則** (磐田市加茂出身) 明治16年(1883)～昭和13年(1938)



開祖平野重定公の子孫。富岡村長、県議会議員などを歴任。

寺谷用水組合管理者として大正8(1919)年以降昭和3(1928)年まで、実に19年の永きにわたりその運営に献身的努力を傾注せられた。

このころ、神田口からの取水は、天竜川の河身の変化により困難となり、毎年堰上工事に多額の費用を投じて、辛うじて必要水量を確保していた。

そこで、翁が代表を務めていた寺谷用水組合と導水計画が一度失敗に終わった東部旧社山疏水普通水利組合が団結し、自ら発起人代表となり、昭和2年(1927)8月に「磐田用水期成同盟会」を組織した。大橋亦兵衛とともに磐田用水幹線改良事業を起こし、阿蔵取水口実現へと導いた。

昭和15年(1940)、寺谷用水組合は供養塔を建立し、氏の名前を刻んだ。



供養塔 大円寺西

おおはし また べ え  
大橋 亦兵衛

(磐田市小立野出身) 明治 17 年(1884)年～昭和 20 年 (1945)



井通村村長、県議会議長、衆議院議員を歴任。

昭和 2 年(1927)から「磐田用水期成同盟会」の会長を務め、昭和 4 年に平野睦則とともに県営磐田用水幹線改良事業を起こした。また、昭和 8 年の県営磐田用水幹線改良事業の第 1 期工事起工を契機に期成同盟会から「磐田用水速進同盟会」に改組し会長を務め、取水口の決定、事業費予算の全額獲得など続発した重大問題の処理解決に奔走した。

しかし、当時国財政は経済不況から窮迫し事業は滞った。さらに昭和 16 年第二次世界大戦に突入すると事業推進の希望は全く立たなくなった。そこで翁は農地開発営団による阿蔵取水工施行の天竜川沿岸大規模農業水利改良事業を陳情、運動し、実現に至った。

昭和 23 年(1948)、寺谷用水組合は供養塔に翁の名前を追刻した。

すずき しょういち  
鈴木 正一

(磐田市豊田出身) 明治 24 年(1891)～昭和 41 年 (1966)



富岡村産業組合長(農業協同組合の母体)、富岡村村長、静岡県議会議員を歴任。その間、寺谷用水組合管理者を 7 年、磐田用水土地改良区連合初代理事長を務めた。

昭和 19 年(1944)の磐田用水通水式にあたって磐田用水連合会長として「よろこびの詩」を詠い、記念碑には「水流而不競」と揮毫された。これは、翁が愛された言葉で寺谷用水と社山用水がお互いに譲り合って水を使おうという意味が込められている。土地改良区東隣敷地内に翁の功績をたたえる「土たから」の碑が建立されている。

昭和 31 年(1956)土地改良区顧問の時には、寺谷用水開祖 350 年祭の記念として水源涵養林事業を発案、推進し、生きた記念塔を後世に遺した。

昭和 43 年(1968)、寺谷用水土地改良区は供養塔に氏の名前を追刻した。



磐田用水記念碑  
「水流而不競」

たけやま ゆうたろう  
竹山 祐太郎

(磐田市見付出身) 明治 34 年 (1901)～昭和 57 年(1982)



農商務省農林技官時代、磐田用水を指導。全国農業会指導部長。

衆議院議員(連続 9 期)、建設大臣、静岡県知事(S42～S49)を歴任。

第 2 代磐田用水土地改良区連合理事長(S33～S41)

特に、翁曰く「きわどい芸当で実現した船明ダム」と表したとおり、船明ダムの建設は翁でなければ実現できなかった。天竜川下流用水実現の最大の立役者。船明ダム左岸の公園には翁の胸像が建立されている。

また、寺谷用水土地改良区敷地内の昭和 46 年(1971)に建立された県営寺谷用排水事業完工記念碑「水能潤万田」(水能く万田を潤す)は、翁の揮毫したものである。



県営寺谷用排水事業完工  
記念碑「水能潤万田」

やまうち かつみ  
山内 克巳

(磐田市草崎出身) 明治 44 年 (1911)～平成 24 年(2012)



磐田市長(5 期 20 年 S41～61)、磐田用水土地改良区連合理事長(10 年 S49～S58)、寺谷用水土地改良区理事長(4 期 16 年 S59～H12)を歴任した。

平成 6 年(1994)、翁が寺谷用水土地改良区理事長時代に始まった「県営かんがい排水事業」によって受益の約半分にパイプラインが設置された。この事業によって田毎に給水栓が付けられ取水が容易になった。

磐田用水土地改良区連合解散時に翁が揮毫された「留魂碑」の「留」は「留」の旧字体で、上部のふたつの「口」は寺谷用水と社山疏水の取水口という意味が込められている。



磐田用水記念碑  
「留魂碑」



# 世界かんがい施設遺産 World Heritage Irrigation Structures



## 世界かんがい施設遺産

国際かんがい排水委員会(ICID International Commission on Irrigation and Drainage 本部:インド)が登録する、建設から100年以上経過し、かんがい農業の発展に貢献したもの、卓越した技術により建設されたもの等の、歴史的・技術的・社会的価値のあるかんがい施設です。

## 登録証文章(和訳) 寺谷用水(水路)

天竜川水系に位置する寺谷用水は、画期的な技術を取り入れた革新的なプロジェクトによって食料生産性を向上させ、水田農業の発展と農家の経済状況の改善に貢献したかんがい施設として、ICID 世界かんがい施設遺産に登録されました。



## 寺谷用水土地改良区

磐田市寺谷用水地域活性化協議会



東アジア文化都市  
2023 静岡県  
Culture City of East Asia 2023 SHIZUOKA